

# 現代社会

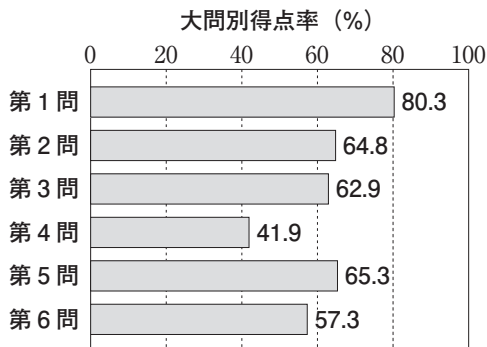
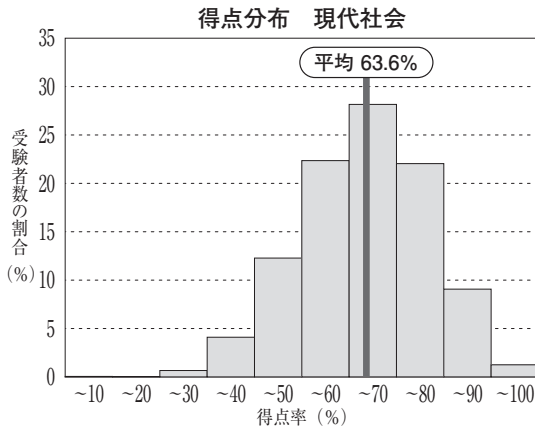
ここまでの準備をベースに、本番を視野に入れた対策徹底を。

## I. 全体講評

今回の「最終 12月センター試験本番レベル模試 現代社会」の平均点は63.6点であり、前回の「全国統一高校生テスト」から8点以上上昇している。

今回最も得点率が高かった第1問「社会保障」は、苦手とする高校生が多い制度や法律名などの理論的事項を含んだ幅広い出題であったが、80%を超える得点率となった。その他の大問も、第4問「貿易」と第6問「国際法、国際社会」以外は得点率が60%を超えている。

受験者にとっては、現在までの準備が間違いでないことを証明する結果とも言えるが、さらに本番で得点の上積みをするためには、苦手な分野・事項への対策を見直していくことが必要である。



## II. 大問別分析

### 第1問 社会保障

租税の重要事項と憲法理解の徹底を。

社会保障をテーマとして、理論的事項を中心に幅広く出題した大問である。得点率はこの模試の平均得点率を大幅に上回り、この模試中最も得点率の高い大問となった。受験者の相当数が一度は学習した分野について、対応ができつつあることを示す結果となっている。そのなかで、租税について問うた問5 [5]は、租税に関する理論的事項である②・③の誤答率よりも、租税分野での頻出用語を含まない記述である④の選択率が高く、15%程度の受験者が④を選んでいった。この設問は「三位一体の改革」という重要事項の理解から①を迷わず選ぶべき設問であるが、たとえ知識で選べなかったとしても「唯一の立法機関」という日本国憲法の条文を理解できていれば、国会の議決事項を内閣が否定できないことは自明であり、選ぶ余地はなかった。正解できなかった受験者は、租税の重要事項を確認するとともに、憲法の確認を再度徹底しよう。

### 第2問 資源・エネルギー

「少し前の時事的事項」についてテキストで確認を。

資源・エネルギー問題に関して、やや手が回りにくい分野や時事的内容も含んだ出題である。原子力の平和利用について尋ねた問3 [11]では、④が30%を超える割合で選択されており、この大問で最も低い正答率であった。東日本大震災の影響を受け、ドイツが原発廃止を決定したという数年前の出来事を認識していれば避けることができる選択肢である。このようにセンター試験では、「少し前の時事的事項」もねらわれるケースがあるので、本番前にもう一度原子力発電についての日本および世界の状況を確認しよう。

## 第3問 平和主義

環境に関する国際的取り決めの確認を。

平和主義を中心とした幅広い総合的な出題の大問であり、この模試の平均得点率をやや下回るレベルの得点率の大問となった。設問により正答率にかなりのばらつきがあり、受験者の相当数が学習を進めてはいるものの、まだ苦手な分野があることが証明されている。特に問7 [20]は、正答率23.2%と、この大問中最も正答率の低い設問となった。③の選択率が正答率を上回る39.3%となっている。モントリオール議定書で定めたフロン廃止はオゾン濃度減少により紫外線の害もたらされることへの対策である。環境に関する国際的な取り決めを見直そう。

## 第4問 貿易

国際経済上の時事事項の理解徹底を。

多くの高校生が苦手意識を持つ国際経済分野からの出題が中心の大問であり、この模試で突出して低い得点率の大問であった。同分野に関してはまだインプットを行う必要がある受験者が多いことを立証する結果である。そのなかでも、問5 [26]の正答率は19.1%と、この模試で最も低かった。サブプライムローン問題の仕組みについての出題であったが、誤文であるBを正文と考えた受験者が70%近くに上った。相当数の受験者が、サブプライムローン問題など、時事要素がある事項の正確な理解が定着していないことが明白となっている。

## 第5問 キャリア教育

西洋思想についての学習の徹底を。

青年期をベースに、倫理的内容やグラフ読解も含めた内容である。そのなかでもアリストテレスの思想について問うた問3 [29]が正答率31.6%と、突出して低かった。特に、ソクラテスについての記述である③の選択率が36.6%と、正答率を超えていた。多くの受験者に、アリストテレス、ソクラテス、プラトンなど古代ギリシアの思想家についての正確な知識がなかったことを示している。この機会に、倫理分野の西洋思想について知識をブラッシュアップしておこう。

## 第6問 国際法、国際社会

国際政治分野の頻出歴史的事項を確認しよう。

多くの高校生が苦手とする国際政治分野の出題であり、この模試で2番目に得点率の低い大問となった。そのなかでも第二次世界大戦後の歴史的事項からの出題であった問2 [33]が45.4%の正答率となっており、この大問中最も低かった。②の選択率が26.4%に上っており、朝鮮戦争と自衛隊設立の時期がポイントとなっていることに気づけなかった受験者が多かったことが推測できる。国際政治分野の歴史的事項を押さえないおすとともに、一見正しそうなことを言っている選択肢については、よく見直して矛盾点があるかどうか吟味する習慣をつけよう。

## Ⅲ. 学習アドバイス

◆見直しと理論的事項の正確な理解を。

本番まで1か月程度という状況のなか、受験者の多くが学習に取り組んで着実に実力を上げていることが推測できる。ただし、本番でさらに得点を上積みするためには、もう一段理論的事項の理解が必要である。例えば第1問問5 [5]などは、誤答の選択肢を選んだものの、解説を読んでみて「それはそうだ」と思った受験者が多かったのではないだろうか。知っているつもりである知識も、センター試験では多様な分野と結び付けた問われ方をするため、正確に理解していないとせっかくの知識を活用できないケースがある。今回の模試で間違えた事項がある場合は、「本番でなくてラッキーだった」と思っただけでしっかり復習しよう。それが本番での好成績に結び付く。

◆学習したつもりの箇所の再学習を行う。

センター試験は、特に努力の正解がはっきりと出やすい。そしてまんべんなく出題されるため、多くの分野に対応できる力を養成する必要がある。試験まで残りわずかだが、ここからの努力が必ず成果に結び付くので、先に述べたように自分が間違えた箇所を復習するだけでなく、少なくとも「日本国憲法」、「環境に関する国際的取り決め」、「国際政治・経済の歴史的事項」、「主要思想家とその思想」の重要事項について復習して、本番にそなえよう。その上で、必ずいい結果が出ると思って本番に臨んでほしい。期待している。